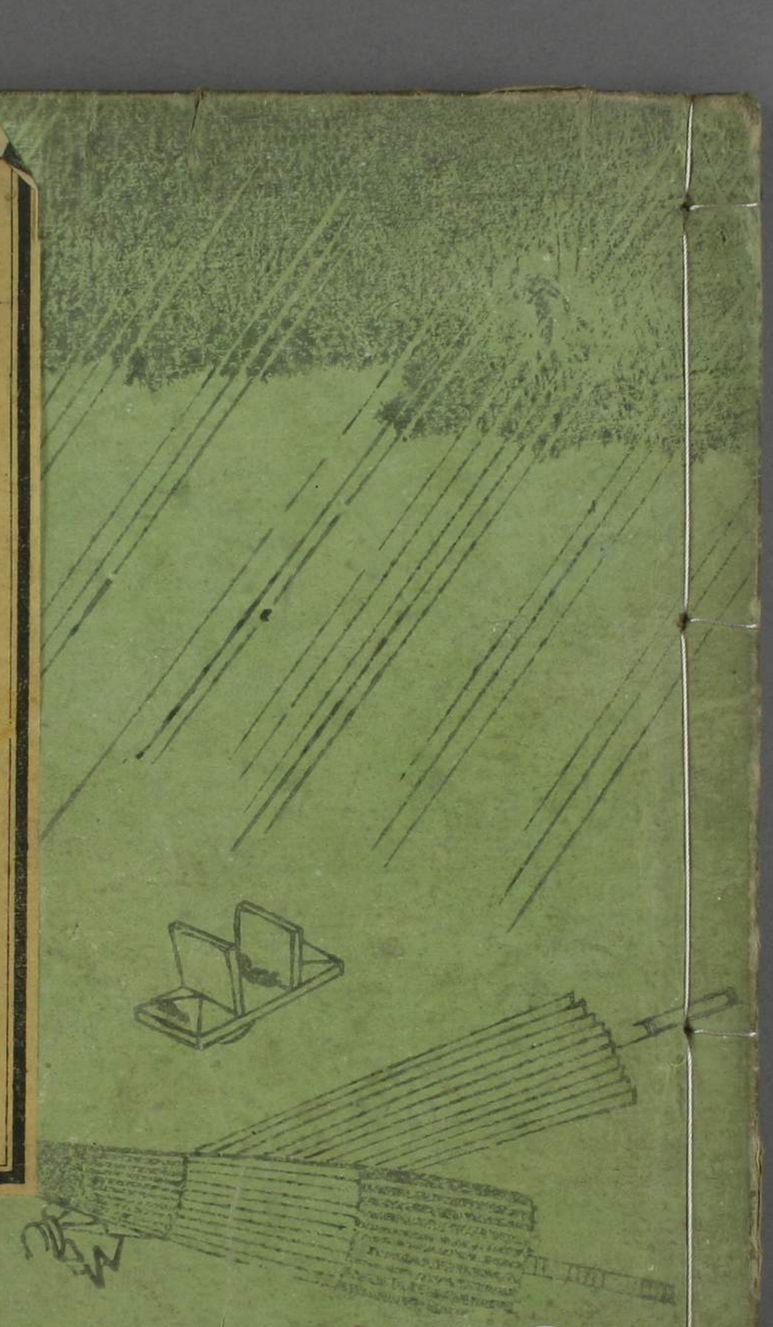
名古屋
山三郎
不破
伴左衛門

繪本稲妻表紙

三



へ13
3151
3

昔話稲妻表紙巻之二

江戸　山東京傳編

㊄ 厄神の報恩

初も佐く良三八郎ハ妻子と具して丹波の國ふらう。大江山の麓穴太の里ふかゝれ住けるが少くのたくわへも。日くの費ふつひとそ。別ふかりつひの便もあけれべ。みづゝ山畑をたがやし。仕別ぬ業の辛苦ふたへと妻磯菜ハ當國の名産ゝる藺莚を編。市ふひさきてわづゝの價をとり。夫婦ともかせぎふしてあ人の児多るを育權月日をおくりぬ。志らるふ三八郎おりへく。忠義のゐくへらひあづ。深あき藤波を殺せしゆへ。くをを不便なり。後ふまべ。若殿御勘當をうけ。ゆき。行方なくあるひるはし。我心づくしも藤波ゞ非業の死もふ水の泡。いあきゆくあれりぜゆくハ彼が

3151
3

冥福を得る種ふもと農業の片手ゆも。念珠とふさぐ。たえまと
念仏とゝなえければ里人異名をつゞて六字南無右衆つとゝびけるを
みぐるも世を忍ぶふいとき名なりとゝ知りひて。つひふ実名とゝたりけり
さて又後くすべ藤波を殺しなる板金岡の筆百蟹の圖の絵巻物
紛失し。長谷部の雲六と計りて。盗取たりと沙汰ありつゝ盗人の
立田の山ふ入て。毋あるべかぐしの穢なる名と得ること。豈恥ざんや。渇をれ
ども盗泉の水と飲を熱をれども悪木の陰ふ息をとゝまりのと。
いふもしてかの巻物となづく出し。汚名をとゝぶやと云ておりひ。一つふん
奸臣不破道犬ゞ悪意を見あらはしてお家の禍の根をなす。義波ゞ
縁者ふ出舎して。恨の刃ふかゝを死後の名と清くとゞしてありひさゞめ。
折く面をかくして大和の國ふいでう。或い京都ふいでて便宜とゝるゞひぬ。

かくてある日。大和より京ふ赴くとゝ。木津川の渡船ふ乗けるふ。船中ふ食の
うちふ一人の老女あり。紅裏の昔模様のゆゝびたる小袖ふ松は菱の紋つけ
なるとゝ見し。さやうなる色と三輪ゝみる腰ふつけ。細き竹杖ふとゝりたるゞ
頭ハ佐野の白雪と乱せるゞ。ゆゝうち枯木のゆうふ痩ゞたれど人品と
さゆゝ賤しくとゝ紫の小袖着たる女の船中ふあるを。浄くいみきらふ
さゆふく。袖をおりてふ抱ひく。片をふひそまり居ゝ。ゆゝ向ひ
岸ふつき。南無右衆つ衆人ゝもふ岸ふのぐり。かの老女く後ふおく進ふ
とゝみく行けるふ。時紅日西ふ落く。天色已ふ晩ゆんとゝ。ゆむ右衆ウ
草鞋のひもとゝむとゝびひゆふ。かの老女ハ遥ふ行過たるゞ。樹木おゝひかりて
その暗き所と思る時。四五疋の犬出来りてとゝまき頻ふ吠くゝやゞく
くひけるとゝ。老女杖をあげく打もとゝ。ゆゝ乱くん形勢ゝり。

六字南無右衛門
木津川の渡ふく
老女の危難を
そくく

六字南無右衛門

ろうや

六字南無右衛門

老女

かゝる難義と思ひてぷむ右衆つ走りつき。大ぐもと打ちにして。老女と思ふよ。
泳くおそれたるふや地ふたゝれ伏て息もたゞげあれば介抱しくさゝぐ
さりけるふや正氣ふあり。ぐくのあん方らちさんぐと。かゝる難義と救ひ
むるかぐでけあさよ山伏恩かさよ一報ぐんとあくえとのぶれば南無
右衆つ打ずくさぐり厚き詞をおくむふゆ。そものふ京の
町まで送り行まゆをぐ〜〜て。相伴ひ三条の四つ辻ゆく東西ふ別れぬ。
さて南無右衆つふ一月ぐり京都ふとどまり。百蟹の巻物とゆはけるぐ。
その留主の万一子栗太郎氏時年八才ありしが。疱瘡と云ふ。毋礒菜ぐ
辛労おかさゆ。ぐ。跪瘡の神の棚をまうけ。赤幣束挾俵張子の徒
磨木兎をら。起臥ふ心をつけ。茜の頭巾をく針ゝること思て隣家の
手とり。紅火燭の朱とうぐふ紫の色ハ更あり。詞の禁忌火のうゝ〜

食物のさ〜合まぐようぐふ心をもらひ湯の尾峠の孫杓子。鮮苔乃咽
なぐよれとゆふこゝふ皆仕作して。看病けるがいとおりに跪瘡ゆく熟氣
つゝ目とひきつけく今もたえいるくありふこと度〜ありぐ出痘
ふいつゝ。面上總身をきゆもふく發瘡〜けまぐかくて命も危し。
時も時折も折とて。夫の留主ふるで便なきこゝふせんと當惑し。
けふやあをやと飯りと待侘娘楓を日ふくゆう村ふつゝてうぐん
をれど。飯かげだふ思ふくいつぶ益愁ぬ跪瘡神の機嫌わ〜さふや。
栗太郎足をうちてふさけび小豆枕とふけうち。人形の脫ひきぬさ
なぐてあれ〜。さゆぐふうゝらくあぐきむれど泣止を殆りてあゆ〜たる
折〜も。ぷむ右衆つ一月ぐりふく家ふふるる礒菜表び出むひて。まぐ栗
太郎ぐ支を語るゆで。ぷむ右衆つ氣づひ。そぐ〜くゆぶれ屏風を

ひきあけて揆みと見るに今までかきさけびてのたまふ栗太郎ぶむ右衛つ
と見て礼正〳〵敬をつくり手をつきていひけるハこゝハ山ゆりひかけざる度うか。
山家へあん身の宅ふく山小児いあん身の子息ふていらこれハ前の月木津
川の渡場ふく危難と救たまひし老女めてたぐり我実ハ疱瘡の神ふる
ぞ我輩大をおそれ支人ふ迯たり我ちもく京都ふあるく痘瘡を
家ちめたるぞ四五日さき當國ふくろう。あん身の家ちもくこゝふ宿し。
山小児ふつきく疱瘡を家ちめぬ元来山児難忘ゆく今一両日を
ゑれハ落命をぐさ和ふ危急の節あん身飯宅〳〵たまひし畢竟
山児の命つれ迯ふり前の日の厚意を報ふ山時なり我ちみ
立ちぐ〳〵我ちれば疱瘡速ふ癒もちく平愈をぐきなり山ちをそ
あん身の族の家ふハ亨〳〵ちぐ〳〵ふ〳〵ちハ山度のぐ〳〵誤ちあるべし。

あん身の姓名いふく問ゆぞぶむ右衛つの実名を告れば老〳〵い
鮑見のうちふさ〳〵三八宿〳〵きつけく簪ふかけおくるぶそのの問
ぐ〳〵ゆる家ふハ我ハ勿論ちもかゝの者をも立〳〵ちをゆぞやいちゑ
やちをふりちいひおり栗太郎問絶〳〵たまひ〳〵見へ〳〵ぶ老女乃次女
いりのごくゆれ外のかゝへ走り出〳〵ちへ失ぬ礒菜栗太郎を
抱き起せば不思議や疱瘡俄ふ癒おちくわ〳〵だふふく氣力ゆ
ぐくふりけるふを夫婦奇異の思ひをふし。ちふ笹湯をかけ赤飯を
調ぐて神おくれ。ふのゆふ〳〵を喜びけり抑痘瘡の日数ハ三日發熱
三日出痘三日起脹三日貫膿三日牧醫れ常数ふふ。栗太郎ぶ
痘瘡かく俄ふ癒おちくれハ全くかの神のたまけふて南無右衛つぶ
好意添りしむひふり山ゆと修へ安人ふ感〳〵あくりちぞ山て

南無右衛門
一子栗太郎
疱瘡を
やむ
栗太郎
うしろ

なむ右ゑ門
うしろ

栗太郎がめざ。平愈して再び召もふく。再又一つの災をいでさふける
礒菜ある夜灯をたて鏡ふしひて髪とりあげつるふ。鏡のうちふ
茂波が顔ありくとうりて。おそろしきさまなれば。おうやとひく背後を
ふり見れば。金の如き火窓をうへて。ねうり家のむすめのあるふて。かくと
笑ふ声を。礒菜いたゐらどのけさまふたるる。其侭絶入ぬ南無
右衆つあいてふくをき抱き起して。醒薬ふくへけふを。ゆうくいきうてり
けぶこれより心衆日ぐふよりて。めのもとをまもる。邑あをざめて痩おとろへ。
日小異ふありそいろ色うそろへうも見えどぶむ右衆つまづけしき
中小も。良薬をめくふふうちいくどと。さく茂波がいふる顔見さくふ
さくぎう其夜くふのぐく苦しくをぬ。命もあやうく見くぬ山時娘
楓ハ十二才。栗太郎ハ八才ふれども。兄弟ともふ年小仏ども。もぐれく

かしこき生まれ。孝子ふれば母の癒を
ふく悲く。兄弟枕方あつまきそひて。忘たるも病床をとるれを。
ふうぐりのみさまうふとし。心を尽してを看病けるかる病人あり
うぐう。一日もうりひをせざれば。烟を立かぬる身るれば。せんをべるふむ
右衆つい病人を兄弟の子ともふあづけおき。其身いたづやしふ
出く。ワづふ日雇のあるひを得て。其日次ある心は苦しさ。つぐあり
うん量想べし。夜ふればふむ右衆つ家ふありて看病をれば。
兄弟の子ども。仏神の力ばたのく奉るより外ふ。いひ
のいせ。ふうう手をとさあひ毎夜。太ちの観音ふもぐまつりて。
南無大悲観音菩薩我くぐ一命をとりあひ。何ぞ母の病苦を
救ひへと祈念。三七日ぐ間まうでけるふ。仏も孝子の誠心を

感じ入ひけるふや。滿願の夜より。母の病やうやおこり。一月をかりの
うちふ全快し。氣力かつて前より多ふ盛ふなる誠是孝行の
功德大なる由なり。

○孝子の物語の法いでふ記しそ。世の童子ふまちとことあり。明心
宝鑑とゝ書よ。我親よ孝行をなすを
ものかなり。ねのれ既よ不孝なれば。子も又我よ孝行をゝん。これ
孝順なれば。又孝順のユヤを拾ふ。ゆ支疑しく思ひ。驚よう黙ゝ
滴くと落る雨をぢくと見よ。そくと落るつぶをたぐをとのり。されば
我父母の老後を安穩ゝしめん。我も又老後安穩なると疑ふ
○又世範とゝふ書よ。おゝよ七人の子ゝ。身をねりまて。ゝゝも
父母の心ふそむゝを。孝道とつくをゝ。父母身まうてのちも。

其靈ふ對して。存生ふいひ残ることをそむくをかゝを。
ゝふど孝道とつくをゝ。ねのれグ幼少の時。父母の愛念
抱育の恩をぶ報ることゝ。世間の孝道とつくをゝ
あるいざるもの。他人の小兒を育あるその情愛の厚きを
見て。父母の若労と思ひ自悟ゝべしゝ。古より孝とゝし
て天のめぐみふゝ。あるひハ立身出世して高禄の人ゝ。
或ハ運とゝ千金と得富貴の身ゝなる例。あげてかぞへ
ゝを。又不孝ふして天の罰討をゝ。病苦貧苦とうけ。悪
獸毒虫ふ害せゝれ。雷ふゝれふゝて非命ふ死ゝたる例も
又をゝふかゝを。されば幼ゝより。孝道ハ人倫第一の道ふて
決定の役儀とゝ。道理とゝ。ゝきまへて少ゝも父母の

おふせとてむすぶ。朝夕茶敬おこたらざる。一生安穏なりしかりふ
心ゞくべき哀ぞし

㊅ 因果の小蛇

かくて後ち南垂右衛門家内。無事ふ打過けるが。一日ふむ右衛門
たゞ母〜ふ出けるふ草むらの裏より。丈三尺ばかりの蛇いでゝ墓をとらへ。
かぎくのまんまとぞむ右衛門つくづくと見て。墓をたとけまれ〜。いろふ
蛇よ汝我ゐるよその墓とゆるせしさあらば我娘と汝ふふべきぞといひ
けるふ。蛇ひらりとば入る体ふて。墓と放さしぬ。ゆの草陰ふ呼ふかれ
入ぬさて農業とりて宮ふ飯けるふ其日の夜半の比娘楓俄ふ發
熱〜して苦〜。色たくうもさけまべ。両親おどろきて目とさめ〜。いそ
ぐ〜く抱起〜てみれば佐哉小蛇楓が腹ふまきつき。かゞ首とたゝく。

香と吐でうぐくさゐ。おそろ〜ふともおろかふ。礒菜ふれと見て身の毛
よだち泣色ふなりてあく取捨ゆりてよといふ。ゆむ右衛門ふ。我昼かど
蛇墓を呑を見てたとけゆゆ。若墓を放ゆべ我娘とふふべ〜と
いひけるが。此蛇我戯を実〜と来まるふ疑か〜戯言いまゆきとあり。
元蛇ハ嫉心ふきりのとゆ〜。眼前ふかゝる奇怪を見る不思議さよと。
いひけく蛇をひきとゆち。薫のうらふ入く携ゆ去。大江山の谷底ふ捨く
くりけるふ其つぐる夜。ふとびて楓發熱〜して苦〜しゆの間ふうまと蛇
来りて。腹ふ巻つく支前のごとし。ゆむ右衛つ益怪こ。ぜうへい殺〜もろべ〜
と思ひ。蛇ハ首ふ魂ゆ〜ゆ〜く首を碑ゆぶれば生ゆるゆと若て実れ。
蛇をとりたふちく。平ゝる石の上ふおき。斧の脊をゆく首と微塵よ
打くきけるゆ。盆〜ふさと飛散て。傍ふ居ゝる栗太郎が面上ゆ

かくことひくくく呼とさけびく倒まてうふむ右糸つ蛇を捨て抱き起せども。
栗太郎が両眼ふ蛇の血ちくくふりたる様子ふく。痛堪がたくくく
おめきさけびぬ。礒菜もいそぎまぐひて介抱をふ。ちでくあうく
やうく泣止けるが両眼ひくく支あさどもるく瞼たくくれあうね。
ふむ右糸つ死くたる蛇を携へあさ。遠所ふ捨てかくりけるが。へまぐ
くくぐるさたふ蛇又来て巻つくくたの如くふむ右糸つ巣をいくち
此度へ焼殺さでやと。火中ふ投ぐけるが。ちぐくあうて火中と飛出まて
巻つきぬくくさめぐかくく取捨んとをれど。蛇の執念いくふじて。ちでも
まるのれを後ふへせんくさて其侭ふうくおきけるが。唯腹ふ巻つきたる
のくふて。別ふ害をふを支るく楓もちぐあのかぐへ我身るぐくねをくく
おりひけるが後くくく蛇ふ別ちとみて。前生の因果くあるかくけて

愛念深くふり。朝夕我食物をわちよへ養ひけり蛇もくくれて食事
の時ふいくれい懐よりる首を出てたのくちくぬ。扨栗太郎ハ蛇血ろ
毒氣両眼ふ入て眼疾くありさめぐ療をくいくと治くかくつふふ
生れもつぬ盲目とぞふける。礒菜左りふ楓をとる右ふ栗太郎
とくへ二人をつくく顧つくいつゆ。便ふ子どもが形勢や。情ふの神仏や。
楓ハ世ふたぐひる。姿養ふ生れつきたくひ女御更衣ふたくも。
くくくくかぬ容儀るふ妖蛇ふ見とれて。くの交りるぬ身とり
栗太郎ハ生つきもきくくふ心ぐへもぐれてかくくありるぐ。おのひも
くくを盲目くるくさよ。殊更兄弟ともふ孝ろくたのるに。
るどてかく薄命ふ有けるぞやいくる宿世の因果ふくかく災の
かくくる支ぞて悪歎の涙ふむせびれば。兄弟の子どもあくそくくあさ。

藤波が怨魂
小蛇となりて
卤無右衛門
楓が腹よ
まとひつく

左右よりとりつきて背を極さとり。共ふ涙をおとし法て介抱をるふいとで
悲しさゆうけりぶむ右糸つ目を忘びたくき。我つくおりふふ。義波ぐ
怨念子ども笑をかやまし。我笑る夫婦ふおりひとさせて。宿恨を
報るふらぐひふ。かれ一點の罪ふくを殺たしべ涙く恨も理なを
三代相恩の主君のたるふせ。ここをまべたくひ子ども笑をとう殺さる
とも悔べさふわるを。礒菜歎くふ我を少しも悲しかどと。歎を胸よ
おしからしてこべ兄弟の子ども笑るにをそうへ父うへのるるへ不らぐるう。
忠義のるふちるひ。其報とをけべ。たるひ我しぐ身いるるの憂目
を見るとも。孫ぞるもいるへべきにわるを。母人よ涙くるげきたまひく。又も
病をひきいぐしるるふと。年ふ似合ぬ理發ろ詞。孝心ふらきき
けるげきに。大丈夫のふむ右糸つも。胸ひしとおしふさうぶおがへをぐるく

涙を拳とりておしぬぐひ。歎を見せぬ武士形。案の心のうちおりひ
ゆしれてふい表ふり。かして又ちぐるく月日とおるりけるぐ。栗太郎盲目
のことるれば一生をるを世ける。りの種ふん琵琶を弄ぐ。琵琶法師
とるるばのちくい高官ふをるを。貴人のそべ近くめるる事も
あるまじきふわるをせるてい生涯安穏の計をるしつるをべしとそひ
つき。頭を剃めく名を文弥くう。礒菜をつけく京ふのぐ。其比音曲
と以て名高く文へし。沢角撿校のるふ法て以ゆるく母子とを小奉公
さを専琵琶を学せけり

七　呪詛の毒鼠

扨も大和の國佐〻木の舘ふおるを。判官員國子息桂之助を
勘當して後。銀杏の前月若母子と。平群の下舘ふ移せ名古屋

三郎左衛門同山三郎父子を守役として付おくれぬ扨桂之助の繼母蜘
手の方といふ悪毒悪ふして桂之助夫婦をふくしいふもちて
桂之助を失ひ實子花形丸を家督ふせんかしと思ひ居けるが思ひもよ
桂之助勘當の身となりぬれば心中ひそかふ喜びり又月若家督ふせん
こともやとはりへ何ぞ〳〵てかれ繼母を失ひたくこゝろ〳〵へども
かれ等ゆへ忠臣名古屋父子つきそひ居て。片時も心をゆるさねば。いかふも
せんすべふく打過けるが。不破道犬姫智ふかければ。蜘手の方乃心底
悪意あるこゝろ見ぬき。これ我大望をとぐるよろこび便りとなりぬ。一時蜘
手の方ふ近づき。好意深き体ふ。ひそかく探りこゝろ。果して月
若母子と失ひ花形丸を家督ふしたき望こゝろ。道犬もこゝろ
何哉も基ふまもせんとこゝろ。ひけるゆゑ。蜘手乃こゝ

かのめるこゝろ。表びぬ。かくて道犬蜘手の方と密談し。先月若と呪詛
をべきにさきの。其比より呪詛の法を承傳る。頼豪院といふ修驗者を
ひそふまもき。射物とおりよへたるこけふ。貪欲深きあのあれば速
ふらけび。密室ふとぢこりて修法ふをかけるさるかぶ平群の下
館小ハ銀杏前月若母子ゑ人移住名古屋父子これを守護して
ありけるが。月若いこゝ已ふ土才ゆをいけるこゝろふ月若偶病を生じて
打臥。寢食安こゝ。次第ふ痩おこゝへ良医をえらび靈藥をふる
といへども更ふもこゝ。眠しばふそれおびゆることなくなり。
殊更怪むべきハ深夜ふいこれば看病の男女おびゝをふこゝを生じ
鼠おりく出く病床を悩めこゝ。後ふハ昼も出く人をもおそれをこゝふ
尤滿〳〵。月若の髪乃毛をこゝひ。肉をもえひずこゝ。頭ふ毒瘡を發して

痛堪がたく。心柔日をおひておこりけり。毋銀杏前歎悲しむこと抜わるを。神社仏閣小立願し。名僧知識の加持祈祷とゝ也ゝ人どと。妖鼠ちりぢりに益怪きこのゝおりりけり。名古屋父子ハ昼夜病床をまもるれを看病けるが。三郎左衛門山三郎ふむひていひけるを。我曽て雪陽雑組を見るふ人夜間ふゆゑあるして髪を矢ふ者鼠ハ妖あり。又鼠人ゆゑ牛馬ふ着ゝありて昼夜避を。いんとゝもとゝろゝあり。若君の御客体をうがふ彼書ふ記を呼の尋常の妖鼠ゝゆふゞ かゝをゝうゞふらくハ呪咀する者ありて障碍をゝとゝおゞゆるけり。汝公をつけゝ怪異の出所を見ゝゝゝゝゝひけれゝ。山三郎其も尤ゝと思ひゝゝれゝゝゝ。ゝれゝ別して心をゝらひ。寝殿の四方ふ眼をゝらゞて守護しけり。さて一夜丑三ツのゝろ。銀杏の前をゝゝゞゝ。

御手医者。乳母侍女等もおゞくをわりと生ゞたるふ不思議や大校群の大鼠行廊の方より歩ゝ来る。形ん常の鼠ゝりゝゝゝゝゝ

佐く木
桂之助の
若君月若
妖鼠の
所爲〳〵
奇病を
あらふ
あさやらふたう
ふたや山三

月ゝ
いてゝ乃剤

呪文をとなへれば忽暴風おこりて。庭の樹木の葉をちらし。池水を巻あげ。寢殿大ゆ震動し。瓦落々々と鳴ゆるみて。今も崩かとおもはれけり。時ゆ若君の壺にてあるやうにもてなすべ。大勢の壺にて泣悲しゝてかなびをし。ぞかさぶる山三郎那裡も氣づかへ。這裡も去れをぶさびゆを折ちくきてんとせしが。頼豪院の數十の鼠を吐その嵐山三郎ゆ飛かゝる。五体をくくてるるをあるはあ〜張念とひ待。又きうつゝまび忽ゆ頼豪院が形をくせく。唯雲霧のごとくさがりたるごゝくあゝめもつぬ庭上ゆ只ひとり山三郎。拳をあげり歯をかゝうし。虚空をあゝみくゝ立たりけり。頼豪院はあゝく身をのぶれうとゝも。山三郎が忠義一圖ゆ精神をこめたる手の裏剣の痕治せゝて。呪咀の法忽ゆ破まれば。ゆめ〜若君の

病日を追て益〻危命となりにけり

八　暗夜の駿馬

扨も蜘手の乃さへ。頼豪院々。修法破き。月若快癒のよゝとなて。大に力をおゝて。山うへいるる計をくゝ。彼等と矣ふべきと。乃太をめしく密談あり。けふ。奸智おゆ乃太少しも屈せで。再又一計を生じ。蜘手の方の耳ゆつきてさゝやけば。蜘手の方くゝすゝこれきゝめゝく妙計あり と喜び。ろくて重病の体をゝ。のゝくゝ。ゆゝ乃太とめして医療のくゝと相談あゆ。乃太かし國大におゝるき。乃太とめして医療のくゝと相談あゆ。乃太かし けるゆ。奥方の御容躰をくゝかゝふ。たゝくゝ邪祟の所為く かゝゝゆゝ。たゝひ者婆扁鵲ゲ神方なりとも。藥の力をゝくくゝ力をくくゝゝるゝ。近曽京都ゆ下し頼豪院ゆ修験者。

安部乃晴明が金烏玉兎の神書と家傳し。ト筮ふ妙を得さるわのふいへばかりとめ〜てうらふいつゝ。おんすあれらし。幸唯今某宅ふあり居ひ〜ゆゑ。貞國これとゆそれいたゞくめしよべとおふせられい道大かしこくこゝひて。ゆゑて私宅ふひつゝ入り。頼豪院ハ額乃疵ゆゝく癒再道犬が妖計ふくにるが。召ふ應ゝて貞國乃目ぞりりにまろいでゝ身乃丈たらく眼中光り。斬髪ちれ〜らゆのごゝく。兜巾藤懸ふ。紅紗の衣と着し。最多角の念珠を袖くゝみふ持中敵乃扇を把めうもまゞゆに金張付乃廣坐敷にねめどおくせゞ坐しなる体誠ふいつゝれ悪魔とも降伏をゞき骨柄なり。貞國まうゞ初見の挨拶おり。奥方乃病体を告てト筮を元きけるふ頼豪院恭く卦と敷下し。孝を施しそいゝ。奥方乃御病氣全く呪咀をる者ありて。若〜ゆゆをふ疑ふし。今四五日を過ゆば御命危うる〜。若疑〜くおゞ〜玉ゞ。御寢所の庭中艮の隅乃土中三尺をゝ〜せ見たまゞ。分明ゆゝべ〜ゝふ貞國羊信羊疑ゆゞ。近仕乃士ふ命じ玉へゞ。近仕乃士かしこふいつゝ。土中をゝ見むふ果〜て一合乃白木乃箱を得く携へ来り貞國ふたてまつる。貞國これをひきゆゝふ内に大小二ツの藁人形ありて。をきゆゝ召もふく釘を打たり。貞國大に驚ゝ。頼豪院ゞ詞を奇なりとこれ呪咀にゝゞひふけまゞ。別ふ一物もふけまゞ。何人乃所為ゆゝや。分別ちゞ〜といれけるふ。頼豪院膝ををゝ。凡呪咀の法ゆゝ。願書ゆくていかゝるひゞ〜。其箱これへといひく箱を取あげつゝ〜見て。ゆゝて扇乃尻をゝく。箱乃底をつきぬきけるふかゞゝ底ゆ〜て其うちゝ一通乃願書出ゝり。貞國ゝゝを

名古屋山三郎
若君の寝殿ゑ
宿侍り妖鼠
牛裏剣を打
俄ゆ暴風起て
寝殿
鳴動を
名古屋山三
名古屋こうた郎

さうひらきさ
前月若丸
たれがぞうぶ
ちぶくくのあ
けるふよう。蜘
菓人形の針
ゆうく快氣
母子を實
たまつぶ
れらいか
さたぐりた

鬼よりもなを
尼法師を
殺されひと
ひて涙を
ふくありは
の非望と
こと皆これ
某月若ふ
判官貞國
母子を益ふ
眼平くう

両人を呪咒するの願文を認め
頼主の名ありて前の自筆にもとづく
家院ふ吧咀をなしひのそ花ふを
投じて焼をてうりて焼まりの方
体をうゝ貞國ふ妾親子ふもゆくいるとなりの
実に孫といふ何を桂ふ助の嘉富
なかりたこそかのと宗親ふふ
若ふ仇名家督ふるこもこし
ハ計ふうも家離れして心い

親と思ひ咒ふ方ふ眼ふ詞
花形丸ふ理ふ詞をすてこ
悪人片時もたをけ
月若丸ふ首打ちまゐすこ

命じければ数手の方道犬と彦見合ひ志ゝ有りとありしかれを
さぐらんとて負國に入て花形九ハ殊更ふ詞をいたしてそむきども
火性短氣の負國少しも宥免ふりけれバ道犬一味の黒星
眼平迷惑彦ふく其坐を退き君命ふ人ども母子の首うさんと
いきぐ名古屋父子ハ渡をまぐ。ある時ハかれ等ともふ打ん
と拵ひ。四五十人の荒男等を引具して平群の館へいそぐ。
嗚呼銀杏前親子の身の〻危ける次第なり。此支きく
下館ふ入へければ名古屋父子大に驚き。三郎左衛門山三郎ふ
むひこれ正しく不破道犬が奸計ふく。姫君ふぬれ衣とおゞ。御母
子ハ失ん〻ふ疑なし。打手のむらぬさに某急ぎ上館ふいくう。
一命ふ入てもかしこゝ去て御命と故ふ〻せんとて。そゞく礼服を

ゑん。楊弓ハ馬をひかせてひそ〳〵打ゑ供人のそうふひゑもおそ〳〵
心せよ。鹿藏とゝふ下部ハ提灯のもせ。走出んとちゝふ。三郎左ゑ門が刀
鞘ぞ〳〵ゝゝれば。山三郎氣ハかゝ。雷ぞ〳〵ふゝつきけゝ。親人御如在ハあ
まゝきゝ。道犬ハ奸智ゆゑき者ゑ。ゑ〳〵ゝゝを彼が計ハおちゝともハ
衆を得ゝハゑ。一言ゝ詞も心をつけ〳〵のゝ〳〵ゝゝへバ。三郎左衛門ハ
ゝゝのゝきゝそれ合點ゑ。かゝ〳〵ぞ氣ぞふ支ゑゝれかゝる内乱ゝゝゝ。
御側近き者ゑハも油ゝゑ。ゝ〳〵ゝれば。唯御二方をゝ〳〵守護ゑ〳〵〳〵
捨て一鞭あて走ゝ〳〵ハ走ゝゆく山三郎身をそゝゝて。かげゑゆゝ
まで見おゝけゝゝ。折〳〵も彷ぞゝゝゝゝる夕烏ハ〳〵悲〳〵けハ鳴をゑ。ゑ〳〵烏
ゑゝのあ〳〵きハ御二方ゝ御身ゝゝゝ。親人の身ゝゝゝ。ゝゝまハも
あれあゑ氣ゝゝ〳〵と吐息〳〵て。胸をゝゝゝゝゝゝゝゝれを一世別

ゝハ後ハを思ひゝ〳〵ゝゝ。ゑハ又不破伴左ゑ門重勝ハ先ゑ君命
ゝハひゝゝ。名古屋山三郎ハ草履をゝ〳〵面を打ま〳〵とハゝ〳〵
遺恨ハ思ひ笹野蟹藏藻屑三平土子泥助犬上雁八名四人ゝ
者とゝ〳〵ひ夜〳〵平群の舘ゝ近辺と徘徊〳〵て。山三郎とつけ伺ひ
けゝ。ハ夜も八辺ハ出び来てゝゝ。ハ夜ハ宵闇ゝゝ空ゝゝゝて
星も見ゝて。あゝもゝゝ暗夜ゝてゝゝけゝ。三郎左ゑ門ハ麻苧ハ提灯
持せ。馬と飛せ〳〵急ぎ来ゝと。伴左ゑ門ゝ五人ゝ者。三本傘ゝ
紋つきゝゝ提灯をゝて。山三郎ハゝゝ〳〵ゝ思ひ物陰ゝゝ一同ハ
ゆゝゝ出ゝゝ提灯をゝゝ〳〵ゝ落せば麻苧ハゝゝ。一腰ハ手を
かけて。何者ゝやゝとゝゝゝ。三郎左ゑ門ハ馬をとゝ。こハ辻斬ゝ
曲者ゝ盗賊ゝ所ゝゝゝゝゝゝ。肩衣ゝゝのけ刀ハ抜ゝ。馬ゝゝ

極ぐるひなもあるべしと。伴左衛門斬つる白双の稲妻目前に閃れば老功頓智の三郎左衛門馬のかげに身を避るゆゑ。伴左衛門刀ばかり鐙ふまへ切つもて。火花ちらと散たり。晴夜くらひ木立ちはげき所なれば一寸先も見へざる藻屑三平土子泥助馬の脚音と心あてに前後よりきりつくるゆゑ目あてちがひ思ひ〻に両人同士打ゆゑ打合と剣の下とくぐぬけく三郎左衛門大上段八が鼻のさきにぞうれば胸ひやりとそのけぞりり。伴左衛門心中ゆゑ山時をゑらびいろ慢をたくさんと思ひけく。息をとしてうかがへば三平泥助雁八等もあらと探りて立まりり或へ原ゆゑ同士打しそ。薄手をもひ或へ木立ゆきつつけく氣といろ。三郎左衛門今ゆゑ果せまる大ゑをかくくる身なれば好て戦心あく。早く山場とのがれやく氣へとけぐも。

四人の者ゆかこまれてせんもべなく。うかひとあしてきりつくる刀。三平ゆ片耳をそぎ。二の太刀ゆ雁八が小指をきり落しれば両人心臆して〻〻〻

不破道犬
蜘手の方と
銀杏の前
月若丑子を
詠も

物ふ包し草履のかたしを取出し。これこれ先年汝我を辱めたる上草履ぬり。膳王ふこそよとのひつ。連打ふ打けるあぞ。三郎左衛門若しげよ息とつき。汝等ハ辻切ら盗賊ら思ひつるふ。さてハ伴左ふつあそありけるら。我いこれ三郎九衛門ふるふといふ壱ぬて。扨ハ人たぐへせしかと。伴左ふつ等一同ふおどろきら。三郎九ふつ刀ぬぐうて立上り。児子に仇をむくふよもせよ。だまし打くハ比奥ふ奴我年こそ老され。名乗合の勝負ふ。汝等ごと犯の鼠輩ども。数十人来るとも物の数とハ知りハ称ども。暗打ふせしるとら。武運ふつきたる身のたてよ犯る合ハ物しかく称ど。唯心残りハ侍二方ハ安否を尋で相果るるるしさよといひつ。ろぐひまるを伴九ふつを已ふて。合破と疏倒し。山三郎と思ひの外運乃尽たるあひぐれの。山三よあ〜ぬハ残念ふれと。汝を打しもふ又此方ふ幸とをることあり。問詰いをさく犯ねとあくさげふ詈つ。やるる切ふるれば。三平。泥助雁八等も三郎九ふつ苦痛の壱をもるぶ立ようそすくふ斬つけ。贈ハ〜ふぞなしなりける。折しもちぐの鐘打交て。諸行無常と告渡。小田の蛙ら鳴さちて。いぐ妄とそくふり。僕鹿藏ハ先程ようり。笹野蟹藏と渡り合。深田の中ふ踏こみて。たぐひよ呼吸の息を心あてふ戦双方薄手をあひりぐ。鹿藏三郎九ふつと伴九ふつぐいひあふ詞を遥ふ渡けり。扨ハ彼奴遺恨ふよりぬ人たぐへてそや御主人とまよかけしかと仰天し。蟹藏と捨て。主人ら壱を方へ探りいんとる比。三平雁八さハさセどく立ふぐり。両人ひくくく切りけなり。藏蟹ふれを丁くうけふ。又もゆんとしなる時。両雲ふれて一輪ら

明月皎々として出木の間とりて光りあきらかなりしば。康義、五人の者を見るに。伴なる者ども四人の者皆見たりたるかのごとなり。五人の者も康義いかりて見たりの下部なれば。生はあるべき後日のさまなりけり。一同ふるまひてきりたるに揃て切つる。勢猛康義も。双拳四手に敵しがたく。危く見えたる所。三郎左衛門つぶ手馬一疋いでえて荒ぶし。五人の者を踏たふしければ。五人の者は大に狼狽てにげたりける。鹿義大にふるうて金棒ふりかたまりたる。四面八方をきりたる。五人の者一方は荒馬ふ踏ちらし一方は鹿義が配物狂ふ敵をるこあるいどいちはし出して逃いでやば康義主人の敵のゆゑとようづりつ。韋駄天走りに追行りける。折しもひふの方より。黒星眼平四五十人の荒男どもとり昊し。高挑灯と前ふたて。行列をつくりおのおのを払ひて足ぐやホをみ来る。鹿義これを屹と見て正是上館の打手なるべん。主餐りて註進ぞきう。彼等追て仇を報んと心は二つ身は一つなれども思案しかねて躊躇しおもむく所をいかなるかのごとくひるがへる黒星眼平は時刻をうつさど。平群の下館ふたせいしひ。これは大殿の義命とかうり。銀杏前の月若ぶ。親子の馬首をたまりうんるひふたり。名古屋父子はいづくよりかあるべしと。色々ふりけれバ。いかに一大事と第中大ふ騒動し。名古屋山三郎走出其儀を刻者館ふ告る者あるふり。父三郎左衛門御助命を願んなり。先刻上館へまゐ祇しゆべ。父が飯りのまゐで。去ぬ〳〵狂言ぐさうべしといろやも果ど。つゐく義命うれば作時も

待こと相うべくど。若遠背ふおうぐ。某奥へ踏込て御首打べ。返答いふといふ。山三郎ちるるくい是非よおうぐ。某令あんかぎりい。御二方と後をとと。まうるぐどいひたくたや身支度して。ととハと。いで斬先をべき勢あり。眼平わぐく笑大殿のおんせ背く不忠者先彼を打取と下知をしば大勢一ゑふ乱入し。山三郎ととりかくみ。火花をちして戦ぐ。このくふ多勢山三郎ハで一人と又ども。忠義とるぐた太刀さきふ斬まくれ。ちどろふらぐれて大庭までさろとひく。其ひゑふ山三郎。奥ろ殿よたせもいり。姫君若君よりひ。父ぐ吉左右ちけたゑいるまでハ。一且舘をゆたちのきれくとつふるぐ。月若の乳母柏木くふ者女ぐもかいじきのあそ。妾ハ若君をあぐりてゆちゆべ。山三ぐのハ姫君と守護くてゆたちのたれかくそつと

がいくく身支度し。若君とせおひ。長刀ゆ小脇ふくくみそ。後門よりを行ゑ。山三郎ハ姫君をゆひまるくせ。づいてのぐれ出ん。たぐ。たちや後門ふも打手のつハゆの立まりてさくくれバ。山三郎ちやりのくくとよぐりつて。多勢のうちゆきりひくれて。生駒山のかくぐおちゆきけり。道犬が奸計の子細をたぐゑるよ。偽筆の達人をたのこ。緑杏前の手跡を見せて。偽願書をかくくゆ。味のりのをくそ。かゑて庭中よ埋ゆ。ゆきけくきつ。山三郎姫ゆせゑひて和ちゆ。生駒山の林麓の辻堂ふおいて。危難よ。あくそ。つぎゆ巻を讀得てゆべ。

巻之二終